

有島武郎の挫折への過程について

小 田 原 洋 八 郎

有島武郎の全集は、戦時中全集ものとして一番安かったそうだし、又ある人に言わせると「有島文学を読んでいます。」と言うのにはじらいを感じなければならなかったとも言われ、今まであまり多くの人によって読まれていなかった。しかし有島武郎は近代日本文学史において、まれにみるスケールの大きい市民作家であり、又一生思想的に動蕩し続けた作家でもあった。

彼の、白樺々における位置については、一応ここでは省略したいと思う。彼の作家活動

は明治四十三年から大正十二年までの十四年間ほどである。その間に小説、戯曲は長編短編を合せて四十編程ある。数は少いが、かなり多様な主題の展開を見せている。彼の作品をいくつかに分類してみると

第一、本能的生活をとりあつかったもの

「カインの末裔」「石にひしがれた雑草」「ある女」

第二、工夫、農夫、漁夫など下層勤労者の生活

を深い人類の連帯感から描いたもの
「カンカン虫」「カインの末裔」「生れ出す

る悩み」

第三、聖書に取材したもの

「大洪水の前」「サムソンとデリラ」

「聖餐」

第四、私小説

「死と其の前後」「小さき者へ」「卑怯者」

第五、作者の体験をもとにして書かれたもの

で本格的構成的ロマン

「ある女」「星座」

彼は妻の死、父の死を経て作品の中で、初めて誰はわかることもなく、おそれることもなく自己について、人生一般について、芸術について、赤裸々な姿を見せるようになる。

今列挙した如く「カンカン虫」「カインの末裔」「ある女」「石にひしがれた雑草」などの本能的生活者から晩年の「骨」「酒狂」などの性格破綻者まで、彼のロオファ的人間が追求されていくことになるのである。

そして彼が「惜しみなく愛は奪ふ」で「思想の絶頂」にたどりついたと言った時に、すでに彼の内部にはかすかながら自分のそのことばに、矛盾があると自覚する芽ばえがひそんでいたのだからか。当時の社会状況も大いに反映して、彼のそういう不安はますます深まっていき、ついに大正十四年六月自

殺してしまつたのである。彼は幼くして英語

を学ばされ長じては留学したりして、かなり外国の事情も知り、又一時はキリスト教徒でもあり、社会主義者の傾向さえ持っていた人物である。ここでは、そういう彼が、何故にくたびかの思想遍歴の後座折せざるを得なかつたかということ、彼の出発から順次思想遍歴などを見ていくことによつて、座折の過程を調べていきたい。彼は「小さき者へ」で

子供たちに向つて、次のように言っている。「お前たちは私のたおれた所から新しく歩み出さねばならないのだ。しかしどちらの方向にどうあゆまねばならないかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出すことができるであらう。」このことばは、つねに私の心をとらえて離さない。私は彼の座折したところから一歩ふみ出して前に歩みたいのである。どうかして、彼の座折をのりこえて

いきたいのである。彼の座折への過程を踏づけることは、とりももなおさずそういうことを私に可能ならしめるのではないかと思つている。

このような観点に立ち、有島武郎という人間を、個性の面と彼をとりまく社会という二つの立場から見たいこうと思ふ。今ここでは

一応個性の面から述べてみたいと思ふ。

彼の一生を象徴的に表現しているものとして、まず「私の父と母」という作品を見ていこう。必要な部分を引用してみる。「私の家は代々薩摩の国に住んでいたので、父は他の血を混えない純粹の薩摩人と云つてよい。父は私達が芸術に携はることは、極端に嫌つて殊に軽文学は極端に排斥した。……

根柢において父は感情的であり、母は理性的であるように想ふ。私達の性格は、両親から受けついで冷静な北方の血とわりに濃い南方の血とが、混り合つてできている。その混り具合に依つて、兄弟の性格が各自異つているのだと思ふ。私自身の性格からいへば、もとより南方の血を認めないわけには行かないが、割りに北方の血を濃く承けてゐると思ふ。何方かと言へば内気な鈍重な、感情を表面に表わすことをあまりしない、思想の上でも飛躍的な思想を表わさない性質、色彩にすれば暗い色彩であると考えている。従つて境遇に反応してとつさに動くことができない。……父は長男たる私に對しては、殊に峻酷な教育をした。……母からは学校から帰ると論語とか考證とかを説まされたのである。……父はこれからの人間は外国人を相手にす

るのであるから外国語の必要があるといふので、私は六つ七つの時から外国人と一緒にいて、学校も外国人の学校にはいった。」

この引用文からみても、彼が一生悩み続けた克己自製の儒教教育と個人主義の洋学教育の二元という矛盾は、すでに幼くして培われていたのである。彼の伝道者的な情熱的な性格（作品に往々にして見られるところだが）もある程度は、薩摩の血を承けているものとみても、誤りではなからう。「暗い色彩である」と言葉すらも晩年の異様な感じをいだかせる作品「酒狂」等を暗示していて興味がある。彼の父が彼はほどこした長男としての教育にしても、彼にとっては大変な重荷だった。

事與彼は、父の死に際してホット安堵のためいきをもらしている。そして又そうする自分自身に言いしれぬ不純なものを感じ自己嫌悪する彼でもある。

軽文学を嫌う父の影響もかなり強いものがあった。

彼は十九才の時北海道に渡った。動機としては腸チブス、肺炎、胸氣、心臓病のため医者に転地をすすめられたのが主なものだが、思うに彼はすでに六才の時に農業にはいりた

いと願っていたので、そういう点からも北海道を選んだのであるまいか。

そして札幌の農学校時代に彼には二つのことがおこった。一つはキリスト教への開眼であり、もう一つは下層社会との交渉であった。

「社会の腐敗すること益々多からんか、覚醒せるもの責任は最も重し」と日記で述べている如く社会主義への萌芽も見られる。

キリスト教への開眼については、熱心なクリスチャンであった森本厚吉と友達になり、彼の影響と祖母山内静子の影響があった。さらにはあまり今まで問題にされていないようだが、性欲というのも彼が宗教にはいっていった一つの理由でないかと思う。彼は性欲の問題に非常に悩んでいた。彼は『聖書の權威』の中で言っている。「性の要求と生の問題」とによって青年時代は圧倒される。私の心の中では聖書と性欲とが激しい争斗をした。芸術的の衝動は性欲に加担し道義的の衝動は聖書に加担した。私の情熱は、その間をどう調和すべきかを知らなかった。而して悩まました。その頃の聖書は如何に、強烈な權威をもって私を感動しましたらう。」すなわち彼ははげしい性欲をおさえるものとして聖書つまりキリスト教が必要だったのである。彼の如

きまじめな潔癖を好む人にとっては、性に關する問題は大きなものがあると思われる。十五才の折中年の寡婦の誘惑を受け遣れたものの、この一夜は非常に悪い影響を与えたという信じたり、三十一才まで童貞を保った（「リビングストン伝の序」）等というところにも、そのことはよく現われていると思う。このように、ある面では性欲防止的役割を果たすものとしてはいったキリスト教への道であったので、明治三十六年アメリカに遊學し種々の体験を得たり、（精神病院の看護夫、農場での仕事）又社会主義者金子喜一と知り合うことによつて、今までの観念的なキリスト教観に疑いを持つようになるのである。そのころになると、かつて彼をひどく苦しめていた性欲の問題も、かなり落ち着いていたのではなかないかと思われる。

このようにして彼の精神的苦悩が始まるのであるが時間の都合もあり、このあたりで終りたいと思う。

最後に本多秋五氏のことばを借りて、結びの言葉としたいと思う。

「武者小路や志賀は、思想を投げ棄てることによつて自己を生かした。有島は思想を背負うことによつてよろめき、遂に倒れた。僕等は誰に学び、どのように生きていくのか。」